

〔研究ノート〕

## 自己隠蔽傾向および抑制的会話態度と否定的 出来事評価の関係

— 回顧的調査による探索的検討 —

Correlation among Self-Concealment and Inhibitive Conversational Attitude,  
and Evaluation for Negative Life events: A Preliminary Retrospective Study

河野 和明

Kazuaki KAWANO

キーワード：自己隠蔽、抑制的会話態度、否定的出来事、認知

Key words : Self-Concealment, Inhibitive Conversational Attitude, Negative Life Event,  
Cognition

要約

過去の否定的経験に対する自己隠蔽者および抑制的会話者の感情と認知の特徴を明らかにするため、探索的に回顧的な質問紙調査を行った。大学生に日本語版自己隠蔽尺度、抑制的会話尺度、および、過去のトラウマティックな出来事とストレス出来事のそれぞれについて経験に対する感情と認知を問う評定項目への回答を求めた。抑制的会話尺度得点および自己隠蔽尺度得点の上位群と下位群について出来事当時と現在の感情を比較したところ、抑制的会話については上位群と下位群で有意な差は見られなかった。その一方、自己隠蔽においては、ストレス出来事、トラウマとも、現在の「怒り・嫌悪」は低群よりも高群が高かった。経験に対する解釈では、ストレス出来事とトラウマの両方で、ポジティブ解釈には有意差がなく、ネガティブ解釈は高群が有意に高かった。感情回復度を比較したところ、「怒り・嫌悪」は、ストレス出来事・トラウマとも高群は有意に回復度が低かった。全体に、自己隠蔽者は否定的経験をネガティブに解釈し、特に現在の怒り・嫌悪を悪化させていることが示唆された。

Abstract

This preliminary study aimed to clarify characteristics of emotions and cognitions of individuals who have self-concealment tendency and inhibitive conversational attitude, in estimation for past stressful events, using retrospective methods. College students were asked to complete the Japanese Self-Concealment Scale (SCS) and the Inhibitive Conversational Attitude Scale (ICAS), and to recall both the most traumatic event in

their life and a stressful event in the past six months. There was no significant difference of past and present emotional intensities between high ICAS group and low ICAS group. However, the score of present "anger/disgust" of high SCS group was higher than low SCS group, for both traumatic event and stressful events. There were no significant differences of positive interpretations for experiences between high and low SCS groups, while negative interpretations of the high SCS group was higher than the low SCS group, for both traumatic event and stressful event. Recovery index of "anger/disgust" of the high SCS group was lower than the low SCS group, for both traumatic events and stressful events. As a whole, it is suggested that high SCS persons recognize negative events as more negative, and increase their "anger/disgust" emotions for negative life events.

### 問題

自己隠蔽(self-concealment)とは、「否定的(negative)もしくは嫌悪的(distressing)と感じられる個人的な情報を他者から積極的に隠蔽する傾向(Larson & Chastain, 1990)」と定義され、心理尺度として自己隠蔽尺度(Self-Concealment Scale; SCS; Larson & Chastain, 1990)が作成されている。自己隠蔽尺度得点は、様々な不適応指標と正の相関を持つことが明らかになっている(河野, 2000)。河野(1999, 2001)はオリジナル尺度に基づいて12項目からなる日本語版自己隠蔽尺度を作成し、大学生および社会人(河野, 1998, 2002)に実施して、オリジナルと同様の結果を確認した。

その一方、河野(2000)は、日常的な会話において、自己の否定的な感情や苦境について話さない傾向に個人差があると考え、この傾向を抑制的会話態度と呼んだ。この個人特性は、「他者との会話の中で、自己の否定的な感情や苦痛についての開示を全般的に抑制する傾向」と定義され、測定尺度として抑制的会話態度尺度が開発された(河野, 2000; 英語版; 東谷・河野, 2003)。

自己隠蔽傾向と抑制的会話態度はどちらも、自己に関する否定的な情報についての開示を抑制する傾向である点で共通している。一方、前報において、これら2尺度は明確に因子が異なっており、回答反応上、別の概念であることが示された(河野, 2008)。さらに、これら2尺度の得点は、主観的な健康状態との関連が異なっている。すなわち、日米大学生において、自己隠蔽傾向が高い回答者は主観的な健康度が低いのに対し、抑制的会話傾向は主観的な健康状態との関連が見られない、もしくは、わずかに高い健康状態と関連していることが示されている(東谷・河野, 2003)。

この知見は、否定的な感情の開示と健康度との関係(Pennebaker, 1997; Lepore & Smyth, 2002を参照)が一般に考えられているほど単純ではないことを示唆する。

では、抑制的会話者と自己隠蔽者は何が異なっているために主観的な適応感が異なるのであろうか。単純に推定して、自己の否定的経験を「とても他者には打ち明けられないもの」と認知している人（自己隠蔽者）と、日常的で軽微な否定的経験について他者に打ち明けられない人（抑制的会話者）とでは、否定的な経験に対する情動的な反応性や経験の認知・解釈に違いがあると思われる。そこで本研究では、自己隠蔽者と抑制的会話者との違いを明らかにする一貫として、過去の否定的経験に対する感情と認知における2者の特徴を質問紙調査を用いて探索的に検討する。調査にあたっては、日常的なストレス出来事およびトラウマティックな出来事の想起を求め、これらの経験に対する感情および認知の評定を求めて、2者の違いを明らかにする。

## 方法

**調査対象者：**大学生 211 名(男性 105 名：女性 106 名)を対象とした。平均年齢は平均年齢 20.39 (SD1.21)歳であった。

**質問紙：**質問紙は、①抑制的会話態度尺度、②日本語版自己隠蔽尺度、③6 か月以内の否定的な経験（以下、ストレス出来事）および④人生の最もトラウマティックな出来事（以下、トラウマ）に対する様々な評定から構成されていた。それ以外にも友人の数や主観的健康度などを問う項目を投入したが、本報告ではこれに言及しない。トラウマおよびストレス出来事については、その経験の想起を求めたのち、出来事に関連する任意のキーワードを3語記入させた。これは、具体的な出来事の想起を確実にするための操作であった。次に、その出来事が起こった当時の感情評価（13項目）を求め、さらに現在のその出来事に対する感情評価（同じ13項目）を求めた。これら13項目は、「悲しみ」、「怒り」、「恐怖」、「心配・不安」、「嫌悪感」、「不快感」、「ばかばかしさ」、「驚き」、「気恥ずかしさ」、「罪悪感」、「楽しさ」、「インパクト」、「精神的動揺」であった。続いて、経験に対する認知（14項目）を尋ねた。これら14項目は、「ふつうの経験」、「めずらしい経験」、「意味のある経験」、「自分の値打ちを下げる経験」、「平凡な経験」、「記憶に残る経験」、「人に話したい経験」、「貴重な経験」、「思い出したくない経験」、「動揺する経験」、「これからまた起こりそうな経験」、「誰かに話せばその人の役に立つ経験」、「将来に役立つ経験」、「周囲の人に迷惑のかかる経験」であった。①②は5件法（1=強い否定～5=強い肯定）で回答を取得した。③④の感情については「1；まったく感じなかった～7；非常に強く感じた」、経験認知については「1；まったくそうでない～7；非常にそうである」の7件法で回答を取得した。

**結果の処理：**(1)感情回復度の算出 出来事当時から現在にかけて、感情がどの程度回復しているかを示すために、怒り嫌悪得点および悲しみ恐怖得点について、「感情回復度」を[当時の感情]－[現在の感情]として算出した。(2)上位下位分析の群分け 抑制的会話者および自己隠蔽者の感情評価の特徴を明らかにするために、抑制的会話態度尺度と自己隠蔽尺度の得点のおのおの上位者下位者約20%を抽出した。その結果、抑制的会話高群(n=46)、抑制的会話低群(n=43)、自己

隠蔽高群(n=45)、自己隠蔽低群(n=41)が構成された。

## 結果と考察

### 1. 指標の作成

#### 1) 感情評価

ストレス出来事に対する13項目の感情評価を因子分析した結果、固有値の減衰状況から2因子解が示唆された。主因子法(プロマックス回転)による2因子解の結果、第一因子に高い負荷を示した項目は、「怒り」・「嫌悪感」・「不快感」・「ばかばかしさ」であったので、この因子は「怒り・嫌悪」因子であると考えた。これら4項目を怒り嫌悪尺度と見なし、合計して得点化した。尺度の $\alpha$ 係数は.77~.84であった。第二因子に高い負荷を示した項目は、「悲しみ」・「恐怖」・「心配・不安」・「驚き」・「インパクト」・「精神的動揺」であり、この因子を「悲しみ・恐怖」因子と考えた。これら6項目を悲しみ恐怖尺度と見なし、合計して得点化した。尺度の $\alpha$ 係数は.71~.84であった。2尺度の得点間には、 $r = .19 \sim .46$ の正の相関があった。

#### 2) 経験認知

経験の認知について、14項目の評価を因子分析した結果、固有値の減衰状況から3因子解が示唆された。主因子法(プロマックス回転)による3因子解の結果、予想されるように、経験認知の2つの因子は、ポジティブ解釈およびネガティブ解釈であった。もうひとつの因子は、「経験の新奇性」因子と思われたが、本研究においては重要性が低いと判断されたため以降の分析から除外した。ポジティブ解釈は「意味のある経験」・「貴重な経験」・「だれかに話せばその人に役に立つ経験」・「将来に役立つ経験」の4項目であり、合計して得点化した。尺度の $\alpha$ 係数はストレス出来事について.84、トラウマについて.81であった。ネガティブ解釈4項目は「自分の値打ちを下げる経験」・「思い出したくない経験」・「動揺する経験」・「周囲の人に迷惑のかかる経験」であり、合計して得点化した。 $\alpha$ 係数はストレス出来事において.59、トラウマにおいて.62であり、尺度としての基準を十分に満たさなかった。しかし、本報告は探索的な結果を呈示することが目的であることを考慮してネガティブ解釈得点の結果についても言及する。なお、ポジティブ解釈尺度およびネガティブ解釈尺度の2得点間に相関はみられなかった(ストレス出来事において $r = .07$ ; トラウマにおいて $r = -.06$ )。

### 2. 抑制的会話についての結果

#### 1) 感情評定

ストレス出来事の「怒り・嫌悪」得点について抑制的会話高低(抑制的会話高群・抑制的会話低群)と時点(出来事当時・現在)を要因とする $2 \times 2$ の2要因分散分析を実施した。同様に、

ストレス出来事の「悲しみ・恐怖」得点について  $2 \times 2$  の 2 要因分散分析を実施した。その結果、両尺度得点とも、時点の主効果が有意（「怒り・嫌悪」得点； $F(1,87)=47.55, p<.001$ ；「悲しみ・恐怖」得点； $F(1,85)=94.27, p<.001$ ）であり、抑制的会話高低の主効果が有意傾向であった（「怒り・嫌悪」得点； $F(1,87)=3.23, p=.076$ ；「悲しみ・恐怖」得点； $F(1,85)=3.85, p=.053$ ）が、有意な交互作用は認められなかった。すなわち、「怒り・嫌悪」得点も「悲しみ・恐怖」得点も出来事当時から現在にかけて感情強度が低下するという、同一のパターンであることが示された。

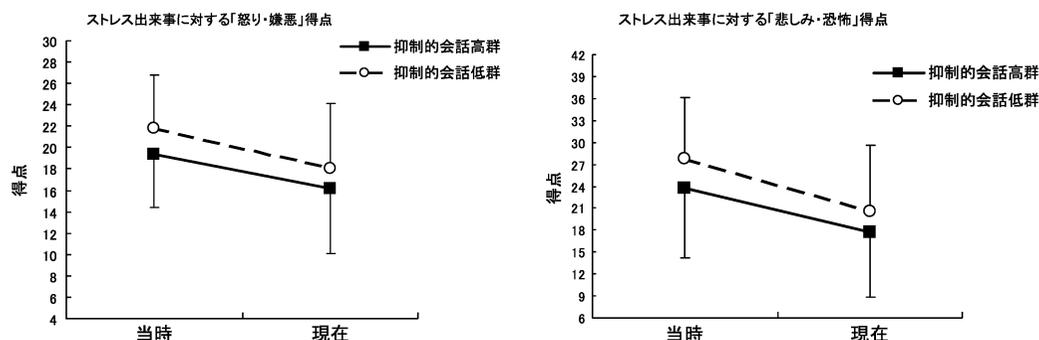


図 1. 抑制的会話高群・低群のストレス出来事に対する感情（左；「怒り・嫌悪」；右；「悲しみ・恐怖」）の変化：垂直線は SD

また、トラウマの出来事の「怒り・嫌悪」得点について抑制的会話高低（抑制的会話高群・抑制的会話低群）と時点（出来事当時・現在）を要因とする  $2 \times 2$  の 2 要因分散分析を実施した。同様に、トラウマの「悲しみ・恐怖」得点について  $2 \times 2$  の 2 要因分散分析を実施した。その結果、時点の主効果が「怒り・嫌悪」得点と「悲しみ・恐怖」得点において有意（「怒り・嫌悪」得点； $F(1,84)=18.73, p<.001$ ；「悲しみ・恐怖」得点； $F(1,83)=140.33, p<.001$ ）であった。また、抑制的会話高低の主効果は「怒り・嫌悪」にはなく、「悲しみ・恐怖」で有意傾向（ $F(1,83)=3.879, p=.052$ ）であった。

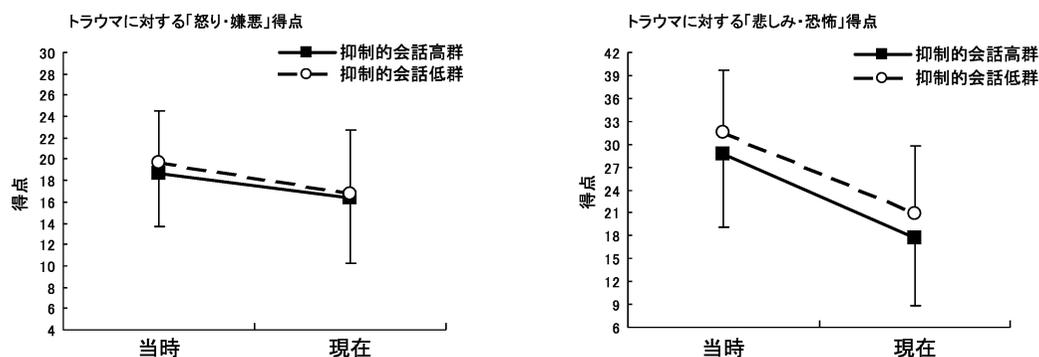


図 2. 抑制的会話高群・低群のトラウマに対する感情（左；「怒り・嫌悪」；右；「悲しみ・恐怖」）の変化：垂直線は SD

時間とともに出来事に対する感情は通常低下するので、時点の主効果が生じることは予想されるものである。抑制的会話高群の主効果が有意傾向であったことから、抑制的会話が高い場合に情動強度を全体により軽微なものとして認知する傾向がうかがわれるものの、交互作用が有意でないことから、低減の程度を変化させるものではないことが示唆される。

## 2) 感情回復度

感情評定の結果を確認するために、ストレス出来事およびトラウマのそれぞれに対し、感情回復度について抑制的会話高群と抑制的会話低群との間で平均値の差を検定した( $t$ 検定による)。どちらの感情得点においても、ストレス出来事およびトラウマについて低群高群に差はみられなかった。このことは、抑制的会話は感情回復との関係が希薄であることを示唆する。

## 3) 経験に対する解釈

ストレス出来事およびトラウマのそれぞれに対し、「ポジティブ解釈」得点および「ネガティブ解釈」得点について自己隠蔽高群と低群との間で平均値の差を検定した( $t$ 検定による)。ストレス出来事・トラウマとも、ポジティブ解釈とネガティブ解釈に有意な差はみられなかった。

## 3. 自己隠蔽についての結果

### 1) 感情評定

ストレス出来事の「怒り・嫌悪」得点について自己隠蔽高低(自己隠蔽高群・自己隠蔽低群)と時点(出来事当時・現在)を要因とする $2 \times 2$ の2要因分散分析を実施した。同様に、ストレス出来事の「悲しみ・恐怖」得点について $2 \times 2$ の2要因分散分析を実施した。

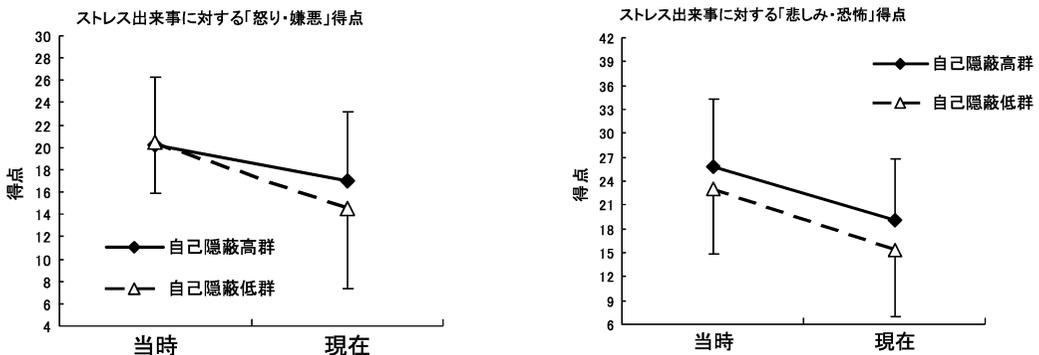


図3. 自己隠蔽高群・低群のストレス出来事に対する感情(左;「怒り・嫌悪」;右;「悲しみ・恐怖」)の変化:垂直線はSD

その結果、「怒り・嫌悪」得点には有意な交互作用 ( $F(1,84)=6.54, p<.05$ ) および時点の主効果 ( $F(1,84)=74.80, p<.001$ ) が得られた。下位検定 (LSD 検定) の結果、当時の感情強度は等

しいが、現在の感情強度に差がみられ、高群は低群よりも強かった。このことは、「怒り・嫌悪」において自己隠蔽が感情の回復を悪化させている可能性を示唆する。「悲しみ・恐怖」得点には交互作用はみられず、時点の主効果が有意 ( $F(1,81)=116.69, p<.001$ )、自己隠蔽高低の主効果が有意傾向 ( $F(1,81)=3.94, p=.051$ ) であった。

続いて、トラウマの「怒り・嫌悪」得点について同様に  $2 \times 2$  の 2 要因分散分析を実施した。同じく、トラウマの「悲しみ・恐怖」得点について  $2 \times 2$  の 2 要因分散分析を実施した (図 4)。

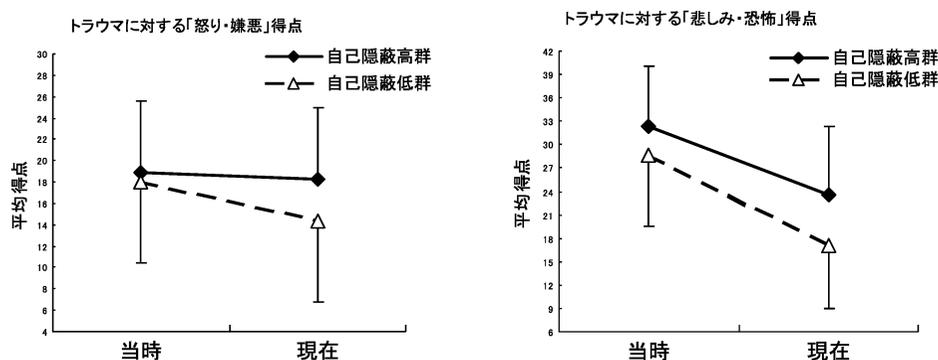


図 4. 自己隠蔽高群・低群のトラウマに対する感情 (左; 「怒り・嫌悪」; 右; 「悲しみ・恐怖」) の変化: 垂直線は SD

その結果、「怒り・嫌悪」得点には有意な交互作用 ( $F(1,82)=6.67, p<.05$ ) および時点の主効果 ( $F(1,82)=14.27, p<.001$ ) が得られた。下位検定 (LSD 検定) の結果、当時の感情強度は等しいが、現在の感情強度に差がみられ、高群は低群よりも有意に強かった。また、自己隠蔽高群においては当時から現在にかけての得点の低下がみられなかった。このことは、ストレス出来事と同様に、自己隠蔽が感情の回復を悪化させている可能性を示唆する。「悲しみ・恐怖」得点には交互作用はみられず、時点の主効果 ( $F(1,80)=142.52, p<.001$ ) および自己隠蔽高低の主効果が有意 ( $F(1,80)=9.55, p=.005$ ) であった。

## 2) 感情回復度

感情評定の結果を確認するために、ストレス出来事およびトラウマのそれぞれに対し、感情回復度について自己隠蔽高群と自己隠蔽低群との間で平均値の差を検討した。「怒り・嫌悪」得点は、ストレス出来事、トラウマとも自己隠蔽高群は低群に比べて有意に低かった ( $t=2.42, df=80, p<.05$ )。一方、「悲しみ・恐怖」得点には、ストレス出来事とトラウマについて低群高群に差がみられなかった。自己隠蔽傾向が強いと、「怒り・嫌悪」に類する感情の回復が悪化することが示唆される。

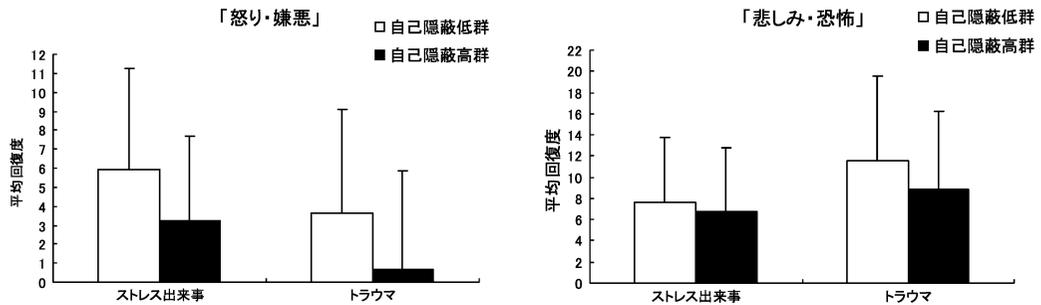


図5. 自己隠蔽高群・低群のストレス出来事およびトラウマに対する感情の回復度（左；「怒り・嫌悪」；右；「悲しみ・恐怖」）；垂直線はSD

### 3) 経験に対する解釈

ストレス出来事およびトラウマのそれぞれに対し、「ポジティブ解釈」得点および「ネガティブ解釈」得点について自己隠蔽高群と低群との間で平均値の差を検討した。

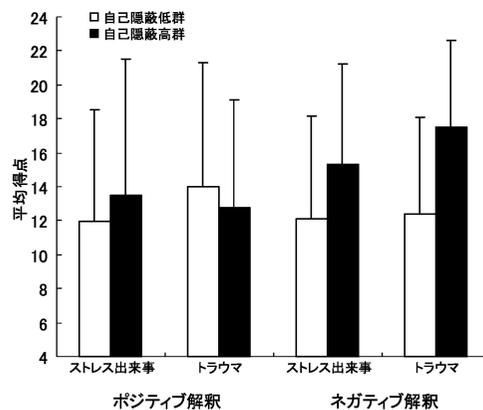


図6. 自己隠蔽高群・低群におけるストレス出来事およびトラウマに対するポジティブ解釈得点とネガティブ解釈得点；垂直線はSD

ストレス出来事・トラウマとも、ポジティブ解釈には有意な差はみられなかったが、ネガティブ解釈はストレス出来事 ( $t=2.58, df=84, p<.05$ ) もトラウマ ( $t=4.61, df=83, p<.001$ ) も自己隠蔽高群において有意に高かった。このことは、自己隠蔽は出来事のネガティブ認知と関係し、自己隠蔽が高いとネガティブな出来事評価が高まる一方、自己隠蔽傾向がポジティブな解釈をゆがめるわけではないことを示唆する。

## 4. 総合的考察

抑制的会話は低群も高群も、ストレス出来事に対してもトラウマに対しても、感情低下を知覚しており、また、感情の回復度に差はない。しかし、トラウマの「怒り・嫌悪」以外、高群の方が感情を低く見積もる弱い傾向があることが示唆される。また、感情に高群低群の差はみられな

い。その理由として、抑制的な会話スタイルを採る人、すなわち、その時々ネガティブな感情表出を抑えがちな人は、否定的出来事について自己や他者にとっての重要度を低く認知する構えがあることが考えられる。そのため、回想的な調査では感情強度そのものを小さく報告するバイアスとなるのかもしれない。

一方、自己隠蔽者は「悲しみ・恐怖」は低群も高群も当時から現在にかけて感情は低下すると知覚しているが、「怒り・嫌悪」は当時の感情強度に低群高群の差がなく、高群では低下しにくいことが明らかとなった。そして、現時点での経験の解釈がネガティブであった。これは、ネガティブな解釈をしていることが情動回復の悪化をもたらしていることを示唆する。

「悲しみ・恐怖」と異なり、自己隠蔽者の「怒り・嫌悪」だけが回復しにくい理由は本研究の結果からは明らかにできない。なお、ひとつの可能性として、「怒り・嫌悪」に類する感情は問題の原因が他者にあるとする認知的評価に基づく感情である（例；Roseman, 1991）ことが関与している可能性がある。すなわち、自己隠蔽は、他者に対する不信感や他者の脅威認知を背景としてもっており、自己ではなくむしろ他者や世界一般に対する否定的な認知と関連しやすいのかもしれない。

本研究によって、抑制的会話は過去の否定的出来事に対して情動的反応性が高いわけではなく、経験の解釈が否定的でもないことが示された。その一方、自己隠蔽者は明らかに過去の出来事に対する否定的解釈が強く、怒り・嫌悪を中心とする一部の感情の回復が悪いことが示された。

なお、本研究で用いた出来事の否定的認知得点は、尺度としての一貫性が低いので、今後この点を改善した上で結果を確認する必要がある。また、回顧的調査による過去の状態の測定は、記憶バイアス等によって必ずしも正確な結果が得られない可能性がつきまとう（古畑, 1994）。この点を克服するためには、同一対象者に追跡的な測定を行うことが必要であろう。

ただし、自己隠蔽が出来事の生起時点ではなくむしろ現在の感情状態を損なうとする本研究の示唆は、否定的経験に関する感情的な処理過程を考える上で一定の手がかりを与えるものと思われる。今後は、自己隠蔽者が現在の状況や対人関係に対する認知の特徴を検討し、それがどのように心理社会的適応と関連するかを明らかにすることが課題となろう。

## 引用文献

- 古畑和孝編, 1994. 社会心理学小辞典. 有斐閣.
- 東谷サト子, 河野和明, 2003. 抑制的会話態度尺度の日米比較－英語版尺度の作成と基礎統計量－. 日本心理学会第67回大会発表論文集, 998.
- 河野和明, 1998. 日本語版自己隠蔽尺度と自覚的身体症状との関係－大学生と社会人を対象として－. 日本心理学会第62回大会発表論文集, 970.
- 河野和明, 2000. 自己隠蔽尺度(Self-Concealment Scale)の諸特性と性差. 松山東雲女子大学人文学部紀要, 8, 121～128.
- 河野和明, 2000. 抑制的会話態度の研究－抑制的会話態度尺度・自己隠蔽・自覚的身体症状の関係－. 日本心理学会第64回大会発表論文集, 889.
- 河野和明, 2001. 自己隠蔽尺度(Self-Concealment Scale)・刺激希求尺度・自覚的身体症状の関係. 実験社会心理学研究, 40, 115-121.
- 河野和明, 2002. 社会人に対する自己隠蔽尺度(Self-Concealment Scale)の適用－ストレスイベントおよび自覚的身体症状との関連－. 松山東雲女子大学人文学部紀要, 10, 131-136.
- 河野和明, 2008. 自己隠蔽尺度(Self-Concealment Scale)および抑制的会話態度尺度の尺度特性－記述統計と因子分析－. 東海学園大学学術研究紀要, 13, 45-52.
- Larson DG, Chastain RL, 1990. Self-concealment: Conceptualization, measurement, and health implications. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 439-455.
- Lepore SJ, Smyth JM, (Eds.) 2002. *The Writing Cure: How Expressive Writing Promotes Health and Well-Being*. Washington DC: American Psychological Association. (レポーレ, S. J. スミス, J. M. 余語真夫, 佐藤健二, 河野和明, 大平英樹, 湯川進太郎, 監訳 2004. 筆記療法－トラウマやストレスの筆記による心身健康の増進－. 北大路書房)
- Pennebaker JW, 1997. *Opening Up: The Healing Power of Expressing Emotion*. New York: Guilford Press. (ペネベーカー, J. W. 余語真夫, 監訳 2000 オープニングアップ－秘密の告白と心身の健康－. 北大路書房)
- Roseman IJ, 1991. Appraisal determinants of discrete emotions. *Cognition and Emotions*, 5, 161-200.

(Kazuaki KAWANO)